

皆川博子（みながわ・ひろこ）
昭和五・一・二一 京城生。昭和六一年に『恋紅』で直木賞を受賞したほか、日本推理作家協会賞なども受賞している。



三島由紀夫（みしま・ゆきお）
大正一四・一・一四
昭和四一・一・二一
二五 東京生。『潮』『豊饒の海』など数々の名作を残し、四五歳で壮絶な剖腹自殺を遂げた。

小山いと子（こやま・いとこ）
明治三四・七・二二 平成元・七・二五
高知市生。この作品の評価をめぐり、文壇に「ダムサイト論争」が起った。昭和三五年「執行猶予」で直木賞を受賞した。

城山三郎（しろやま・さぶろう）
昭和一・八・八一 名古屋生。本名杉浦英一。昭和三年「総会屋錦旗」で直木賞。経済小説で独自の分野を開拓した。

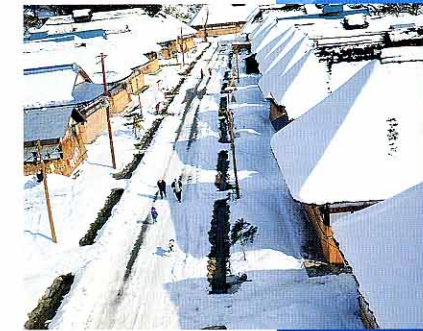
曾野綾子（その・あやこ）
昭和六・九・一七 東京生。本名三浦知寿子。キリスト教的思想が根底にある名作を数多く書いている。開発以前の只見を舞台とし、清冽な愛を描いた『只見川』（昭和四三）もある。



司馬遼太郎（しば・りょうたろう）
大正二一・八・七
大阪市生。歴史小説家。代表作に、『国盗り物語』、『龍馬がゆく』、『坂の上の雲』、『街道を行く』などがある。



○南会津の山並み



○大内宿



○田子倉ダム

73 会津恋い鷹

小説 皆川博子 昭和六一年（一九八六）

南会津の豪農で肝煎きまひの家に生れた娘・さよは気丈な女性。会津藩の鷹匠の下士に嫁ぎ、鷹の飼い方を覚える。戊辰戦争の荒波にもまれて、会津から明治の吉原へ、みだらに美しく時代の嵐の中を生きる姿を描いたもの。書下ろし作品で昭和六一年に講談社から刊行。



74 沈める瀧

小説 三島由紀夫 昭和三〇年（一九五五）

昭和二〇年代の後半から只見川電源開発のダム建設がはじまった。城戸昇は電力会社に勤めるエリート。彼はダム建設の越冬隊に加わって奥会津に入る。彼は出発前に人妻の頸子と会うが、越冬が終ると頸子は…。瀧に託して不毛の愛を描いた作品である。

75 ダムサイト／黄金峡／無名碑

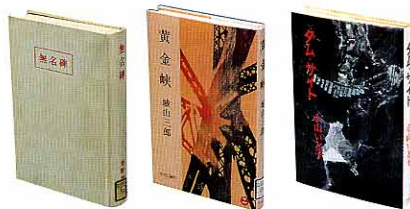
小山いと子／城山三郎／曾野綾子 小説
昭和三八年（一九五三）／昭和三四年（一九五九）／昭和四四年（一九六九）

昭和二〇年代後半から三〇年代には、電源開発のダム建設ブームが起き、奥会津の只見川に沿って、巨大ダムが次々と建設された。これをめぐり多くの小説が書かれたが、テーマの一つは、住民移転の補償にまつわるもの、他は建設にあたる技術者達の姿であった。

『ダムサイト』は、村の娘ますみと相愛の青年茂治、働き者の茂治も補償の現ナマが出まわると墮落するという筋で、ダム建設のもたらした悲劇を描いている。

『黄金峡』は、用地買収のため、かつて学童疎開でこの地に来たことのある主人公若松が目にする、色と欲のからむ土地攻防と黄金騒動を描く。

『無名碑』は、ダムの建設技術者を主人公にしたもので、ダム工事を終え、東京に戻る途中知り合った女性と結婚した三雲は、その後、子供の死や妻の発狂に直面する。タイ奥地の道路建設に派遣されるが、そこでは更に大きな悲劇が待ちかまえている。



76 峠

小説 司馬遼太郎 昭和四三年（一九六八）

自由な考えをもち、近代西欧思想を学んだ開明論者でありながら、長岡藩を率いて官軍と戦った家老河井継之助の、北越戦争に敗北していく壮烈な姿を描く。継之助は只見村に落ちのび、若松城にいた松本良順の治療を受けるが、塩沢村で息をひきとる。